

新刊紹介



椎名恒・野中郁江著

『建設』
(日本の「ビッグ・インダストリー」
シリーズ第8巻)

栗山 嘉明

町の書店に「激震」、「破壊」、「沈没」という文字がおどる。当たり前の光景になっているが考えてみると日本社会の異常な姿である。それらの本の多くの場合、情勢の読み方と戦略戦術論で、各産業を具体的に分析して将来を見通しているものは少ない。そのなかで、大月書店から「ビッグインダストリー」のシリーズ本(全8巻)が発行された。これは、1990～97年にかけて刊行された「日本のビッグビジネス」(全24巻)の姉妹版で、今回のシリーズ本は2000年5月から2001年9月にかけて刊行されたもの。①自動車、②情報通信、③総合重機、④電力、⑤流通、⑥金融、⑦交通運輸、⑧「建設」から成る。今回の企画は、前回をさらに深め、産業の視点からグローバル化、産業構造の再編成のもとでの企業活動について分析し、将来方向を考察しているのが特徴である。ここでは「建設」について紹介する。

「建設」の著者は椎名恒氏(北海道大学助教授、社会政策・建設労働問題)、野中郁江氏(明治大学教授、経営分析論)である。内容は7章からなっている。序章・根底から揺らぐ日本建設産業のあり方、第1章・建設産業とはいかなる産業か、第2章・戦後の日本経済と建設産業、第3章・90年代の建設生産の変動と情報化、第4章・90年代の下請け雇用構造の変化、第5章・終着点の見えないゼネコン危機、第6章・ゼネコン粉飾決算のゆくえ、第7章・行き詰まる戦後建設産業秩序、終章・21世紀の建設産業をめぐる課題。

序章で概括的に本書の視点について明らかにしている。重化学工業の産業基盤づくりを通じて巨大規

模に成長した建設産業は、①建設需要総量の減少のもとで弱肉強食型受注獲得競争を激化させ、②元請のコストダウンと下請け取捨強化を通じて、広範な下請け業者が疑問と反発を強めている。③大手ゼネコン自体、粉飾決算、リストラ、談合・癒着体質など、企業として社会的責任を問われる事態が表面化し、④現役労働者にも多大な影響を及ぼしているが、⑤労働者・職人・技術者・手間請労働者などから公正な労働基準の確保を求める運動が展開している。

産業分析を中心にしているため、気楽な読物ではないが、問題意識を持って読むと理解が深まる。一読してみて、日本経済構造との関連で建設産業を位置付け、公共事業産業化、労務管理、技術を加えて経営と労働の変化を分析していること、不良債権最終処理と経営・労務管理の関係について論及していること、建設産業転換の主体的条件を考察していることなど建設産業の将来方向を解き明かすのに役立つ。

(大月書店・2001年9月刊・2200円)

(くりやま よしあき・建設政策研究所副理事長)

宮前忠夫著

『人間らしく働くルール
～ヨーロッパの挑戦～』

小川 英雄

10月の完全失業率が過去最悪の5.4%になったというのに、大企業は「雇用は手段の一つで目的ではない」(富士通・秋草社長)と称し、労働者切り捨てに躍起になっている。こうした無法状態に歯止めをかけ、国民の完全雇用責任を持つべきは政府は「解雇ルールを法制化しよう」と言い出したが、我々の求める「解雇規制」でなく「解雇促進」のルール作りというのだから開いた口が塞がらない。日本のこの異常さと対極の関係にあるヨーロッパの労働者の実情が改めて注目を集めている。

本書は、解雇規制や労働時間短縮、男女の賃金格差は正など、どれをとっても遅れている日本に比して、ヨーロッパ各国の進んでいる状況を対比させるにとどまらず、それがどんな闘いの過程で作り出されたのかを掘り下げている。さらにこの間全労連で